令和　４年度　　園評価書

園番号　10　園名　長沼こども園

Ⅰ　経営の重点に関わること

評価段階（A：よくできている　B：概ねできている、C：あまりできていない、D：できていない）

1　教育・保育目標	2　重点目標	評価指標	園説明	自己評価	関係者評価	園関係者評価委員から	改善策（来年度の具体的な取組目標等）
心豊かな たくましい子	もっとあそぼう もっとつながろう	○いろいろなことに興味をもち自分から夢中になって遊んでいる	・子どもの興味・関心に合わせ環境を変化させたり再構成することで、関心の幅が広がり更に試行錯誤したり遊びを発展させたりしていた。 ・園庭では各クラスの基地やとっとき棚、室内ではとっときスペースや名札の工夫など続きのできる保障をしていくことで、子ども達が「またやりたい」「明日もやりたい」と目的をもち登園し自分から遊んでいる。	A	A	＜遊びの成果について＞ ・とっとき棚、基地の環境がすばらしいです。一年の大きな成果だと思います。遊びの連続性が見られ、それを職員間で共有しようとしていることがまたすばらしいです。	・引き続き「もっとやりたい」「明日もやりたい」という子ども達の主体的な園庭遊びの継続、発展と同様に室内遊びの充実も図っていく
		○自分の思いや感じたことを言葉や行動で表現している	・幼児組は振り返りの時間や帰りの会の際円形で行ったり毎日繰り返し行ったりしていくことで安心して自分の思いや感じていること、考えたことなどを表現しやすくなり、自分なりの言葉で伝えようとしている。 ・年間を通し保育者が子どもの発達段階、背景等踏まえ思いを聴き受け止めたり、共感したり、一緒に考えたりしてきたことで子ども自身が表現する力がついてきた。	A	A		・困っていることを伝えることが苦手な子が多いので年齢や個人差等あるが、保育教諭が察して全て代弁するのではなく簡単でも自分の言葉で思いを伝えられるような支援をしていく
		○友達の良さを認めながら一緒に遊びを楽しんでいる	・保育者が遊びの中での子どもの発見や試行錯誤する姿を捉え周りの子ども達に知らせたり、振り返りの時間に紹介しその日のあそびの共有を繰り返し行ってきたことで、子ども達自身が友達の良さを見つけたり一緒に楽しんだりする姿に繋がった。	A	A		

Ⅱ　各領域に関わること

大項目	中項目	評価指標	園説明	自己評価	関係者評価	園関係者評価委員から	改善策（来年度の具体的な取組目標等）
1 こども園における教育及び保育	(1)0歳から小学校就学前までの一貫した教育及び保育	発達過程、学年目標を理解し、いろいろな人・もの・自然とかかわることができるよう教育及び保育している	・乳児組は近隣の公園や園周辺の散歩に出かけ自然に触れたり近隣の方との触れ合ったりすることを大切にしている。幼児組は活動を通し近隣園の友達、高校生、小学校教諭等外部の方とかかわる力がついてきた。 ・園内では日常の遊びの中でのかかわりに加え、体操当番・トントン当番・お店ごっこ等を通し年長児を中心に異年齢のかかわりが深まった。	A	A	＜生活習慣の大切さについて＞ ・１歳児の保護者から小学校教育についてアンケートで意見があったようですが乳幼児期に先ず大切なのは生活習慣です。睡眠・朝食など成長期の子どもと大人は全然違います。 ・にじいろ保育園も同様、乳児保育園だが22：00、23：00に就寝の家庭も少なくないです。先日睡眠の大切さについてのお知らせとアンケートを配布しました。 ・保護者も育てていく時代です。 ＜保護者同士のつながりについて＞ ・今、意外と保護者同士のつながりは無いのではないか。孤立してしまい情報共有がしにくい家庭があると思うので、園の行事等でつないでいくのもこども園の役目であると考えます。 ＜中高生とのつながりについて＞ ・科学技術高校とのつながりの第一歩を踏みだせたのも成果だったと思います。見たことのない機械等たくさんあるので見学をさせてもらっても子どもの興味・関心が広がるのではないか。 ＜地域との連携について＞ ・コロナ等が落ち着いたら老人施設とつながりがもてると良いのではないか ・サロンの参加者はどれくらいいるか。地域にも利用できる施設があります。	・愛宕山、観音山、谷津山など地域の自然資源を活かし教育・保育に取り入れていく。計画的に山へ出かけていき、子ども・保育教諭も一緒に五感を働かせみたり、さわったり、感じたりしていく
	(2)一日の生活の連続性及びリズムの多様性への配慮	一人ひとりの生活リズムを踏まえ安定した気持ちですごせるよう静と動のバランスをとり遊びや生活の流れをしている	・一人ひとりの生活リズムの違い以外にもコロナ等の状況で登園できないことがあった際、遊びの流れを止めないよう遊びの経過を休んでいた子に伝えたり、保育者が仲立ちしながら繋いでいくことを大切にした。 ・長時間保育の子ども達の安心・安定を考慮し玩具の種類、数、玩具の取り出しやすさなどを話し合い遅番・早番環境を見直した。定期的な環境の見直しを継続していく。	A	A		・担当を決め遅番・早番環境の定期的な見直しを行っていき、子ども一人ひとりが常に好きなことを選択し楽しめるようにする
	(3)環境を通して行う教育及び保育	子どもの心を動かす環境づくりをしている	・遊び改善構想のテーマへの意識をもつことや月の反省用紙を見直し実践していく中で、子どもの心が動く瞬間を捉えようという職員一人ひとりの意識が高まった。子どもの心が動く瞬間を見逃さないよう“子ども達とかかわって一緒に遊ぶ”ことを職員間で共通意識していく。	A	A		・そら組の定期的な見直しと管理方法を検討していく ・子どもが興味・関心をもったことを遊びに取り入れ、試したり考えたりして子ども自身の学びへつながる環境づくりをしていく
2 安全管理・指導	(1)事故防止・防災	多様な災害や事故の情報を共有し、職員全員で安全な園生活を保障する	・地震、火災、洪水、不審者訓練等様々な想定で訓練を重ねている。避難の仕方で疑問に思ったこと、感じたことを声に出しその都度確認していった。 ・不審者訓練についてはフローチャートを見直し検討を行い、役割等を変更していった。	B	B		・不審者訓練のフローチャートを見直し役割の変更をしたので職員間で共有し訓練に取り組んでいく。課題を出し再度改善し園児の安全を確保していく
3 保健管理・指導	(1)健康教育の充実	個人差に配慮しながら基本的な生活習慣が身につくように、家庭と連携し発達に合わせて指導している	・個人差(年齢、性格、経験等)を理解し一人ひとりがどの程度生活習慣が身についているのかを把握するようにしている。身のまわりを清潔に保ったり健康に関心をもったりしながら身につくよう、手洗い・うがい・消毒等がなぜ必要なのかを年齢や個に合わせ伝えている。保護者に対しては登降園時や園だより、個人面談で共有している。	A	A		・引き続き基本的生活習慣の大切さなぜ必要なのかを年齢や個に合わせて伝えていく。保護者にも健康教育について園だより、個人面談などで伝えていく
4 特別支援教育・保育	(1)支援体制づくりの推進	個別の支援計画に基づき、その児の好きなこと、得意なことが活かし園生活が楽しめるようにする	・支援児一人ひとりのあらわれや課題を把握し、今できることよりも少しだけ難しいことをねらいとしスモールステップを心がけサポートプランの作成をしている。支援児自身が好きなこと、得意なことを活かしたり自信をもてるようポジティブ支援をしている。職員会議の中で個々の育ちや支援方法を共有し、会議に参加できない職員には書面で共有している。 ・平行通園先に見学に行き、支援方法の共有をしていった。	A	A		・サポートプランの形式に少し変更があった。引き続きスモールステップを心がけ作成し、支援児が自信をもって遊んだり生活できるようポジティブ支援を行っていく。サポートプランを共有し全職員で同じ意識で支援していくようにする
5 組織運営	(1)組織体制の充実	子ども理解の語り合いが常時行われ、全職員が情報を共有し、連携して保育している	・朝の打ち合わせを行ったり、打ち合わせノートを見ることで日々の伝達事項等は情報共有しやすくなった。 ・子ども理解の語り合いについては、エピソードや育ちはその都度伝え合っている。勤務時間の異なる職員同士ができるよう少し工夫できると良い。	B	B		・クラス担任以外の職員への伝達方法を工夫していく ・勤務時間の異なる職員同士で子どもの育ちが共有できるよう付箋をツールとして皆で行っていく
6 研　修	(1)研修体制の充実	子どもがもっともっとやりたいと思える環境づくりを子どもと一緒に行っている	・マルチパネ、コンテナ、タイヤ、テーブル、椅子などの可動遊具や子どもが自分で動かせる玩具を更に充実させたことで、自分達で考えサーキットのコース作りをしたり乗り物や建物に見立てるなど工夫したり試行錯誤して遊ぶ姿が増えた。 ・公開保育を行ったり、月の反省用紙を見直したりして“子どもにとっての面白い”の捉えを再確認し次の環境の準備に活かしている。	A	A		・全クラス公開保育を行う中で会計年度の職員も公開保育に参加できる体制を研修部で整え行っていく
7 教育・保育環境整備	(1)教育・保育環境の充実	子どもたちが自分から遊び出したり、片づけたりできるよう環境づくりをしている	・園庭に各クラスの基地があることや遊びの続きの保障(とっとき棚・とっとき名札・そのまま取っておく等)をすることで遊び出しはどの子もスムーズである。 ・遊びが充実し片づけまで楽しくできる経験をしている子もいるが使ったもの、作ったものが大切に扱われず置いたままになっているという課題もある。また、年齢やその時の状況によりどこまで片づけをするかということを職員間で共通理解していく。	A	A		・子ども達が身近な自然環境の中で見つけたり興味・関心のあるものを使い、自ら遊びが展開できるような環境を子どもの思いを汲み取りながら準備していく
8 家庭との連携・協力	(1)家庭教育への支援機能の充実	保護者と子どもの育ちを共有し、保護者自ら思いを出せる雰囲気や場をつくっている	・送迎時の会話や幼児組は日々の保育ボード、乳児組は個々の連絡ノートでのやりとりを通し子どもの育ちを喜び合ったり保護者の思いを聴いたりしている。 ・全家庭と個人面談を行い保護者と“個”の育ちの確認ができている。必要に応じてこちらから声をかけ面談を行うことで保護者から言い出せなかった思いを聴き、悩みや不安に対し共感したり具体的な対処法を一緒に考えたりしていった。	A	A		・園の行事を通し保護者同士を繋ぎ、成長の共有をしたり悩みを言い合える関係作りを支援する ・遊びや遊びの中での育ち、保育教諭の意図など発信方法を工夫し保護者に伝えていく
9 近隣の学校との連携	(1)近隣の園との連携の推進	公開保育を行い情報共有や学びの場としている。また、近隣の小中高生と交流する機会を設け関わる力を深めている	・全学年公開保育を行い自園の職員以外に他園や小学校の職員に希望で参加してもらい遊び環境や保育者の子どもへのかかわりについて学び合った。 ・科学技術高校での泥団子体験、農業高校でのかつぶし芋収穫、千代田小学校図書室訪問、上土こども園との交流の機会などを大切にしていった。楽しんで行う中で様々な人とかかわったり施設への期待に繋がったりした。	A	A		・高校生との交流を引き続き行っていくと共に小学校との繋がりがもてるようスモールステップで進めていく。千代田小学校の行事の練習や授業の見学、児童と園児の交流の機会を作っていく
１０ 地域との連携	(1)信頼される園づくりの推進	おしゃべりサロンや一時預かりを通して保護者の相談にのったり、子育ての情報を発信している	・おしゃべりサロン、一時保育など感染症予防に注意しながら行っている。おしゃべりサロンでは担当職員が参加者同士を繋ぐ役目となっていくことで、参加者同士が子どもの育ちや困っていることなどの情報交換ができる場となっていった。一時保育は繰り返し利用するうちに、親子とも担当職員やクラスに慣れ落ち着いて過ごせている。	A	A		・地域の山をよく知る方と繋がり、山について様々なことを教えてもらい遊びに取り入れていく ・一時保育を積極的に受け入れ子育て世帯への支援を継続していく